（体験版）
男子校に入学した男装JKが同級生に
男同士なら普通だよと言われ
抜きあいっこからセックスまでさせられる話

第一話

友達の親切心で精通させてもらうけど、クリちんぽなので射精できるわけもなく、イってもイってもシコシコされ続ける話

第二話

抜き合いっこしようと誘われクリをしごかれるし、「この穴なーに？」とおまんこほじくられて同級生の机の上で何回もお漏らしイキさせられる話

第三話

友達に唆（そそのか）され、男子用水着を着ておっぱいを晒してプールの授業に参加する話

第四話

お泊まりで散々イかされ、挿入も許してしまい、友達ちんちんで射精（潮吹き）させられまくる話

番外編

二年生になった男装JKの一日

～自習中に射精させられたり、男子トイレでおしっこさせられたり、放課後は抜き合いっこしたり～

第一話

「えぇっ！　一人だけですか！？」

夕方の校長室に、私と両親の驚嘆の声が響いた。校長と教頭、そして四月から私の担任となる先生は、気まずそうに頷いた。

無事第一志望の高校に受かった私は、春休みを満喫していた。入学まであと2週間という頃に、高校からお伝えしたいことがあると連絡があり、何事かと両親と馳せ参じてみれば、これである。

「…はい。先ほど申し上げました通り、本日もう二名の入学予定だった女子生徒さんが辞退されまして、女子生徒は横田ゆうさんのみの入学となります」

校長は入学予定者名簿を見せながら、再度私たちに告げた。

志望校はもともと男子校だった。県内ではこの高校でしか学べない学科があり、男になってでも入学したいと思っていたのだが、この春から初の女子生徒も募集するということで、迷わず志望を出したのだ。入学手続きの書類提出で来校した時、女子の入学予定者は三名と聞いて、女子生徒の少なさに震え上がったのは先日の話。ここに

きてまさかの入学辞退とは。
「……ありえない」
心からの言葉が漏れた。両親は、なんとかなりませんかと先生たちに詰め寄った。校長は深刻な面持ちで口を開いた。
「すでに入学手続きが済んではおりますが、取り下げすることは可能です」
「……ゆうはどうしたい？」
父と母が心配そうに顔を覗き込んでくる。私がどれだけこの高校で学びたくて、必死に勉強してきたか知っているからだ。私の答えは決まっていた。
「取り下げないでください。私はここで学びたいです」
背筋を正し、先生たちを真正面からしっかりと見つめて答える。辞退すると思っていたのか、彼らは驚きと喜びの表情を浮かべた。それに反し、両親たちは複雑そうだ。無理もない。一人娘が、たった一人の女子生徒として男だらけの学校に入学すると言うからだ。
「学びたい気持ちはわかるが……。ゆう、女の子一人なんだぞ。何かあったら――」
「それでしたら、男子生徒として入学するというのはどうでしょうか？」
不安そうな両親たちに、校長がぶっとんだ提案をあげ、その場にいた全員が素っ頓

狂な声をあげた。校長はそれを気にすることもなく、説明を続けた。
「我が校はゆうさんの学びたい気持ちを尊重したい。しかし唯一の女子生徒というのがネックなのであれば、学生登録は女子として登録し、学校生活は男子生徒として男子の制服を着て通学し、のびのびと勉学に励んでもらえればと思うのです。友人もできやすいでしょうし」
「し、しかし……」
「トイレは職員用を使って貰えばいいですし、我々も来年度はさらに女子生徒に受験してもらえるように、広報に力を入れます。女子生徒が増えれば、ゆうさんも女子制服を着て生活できると思うのですが」
「なるほど……」
「我々はゆうさんの学校生活を全力でバックアップいたします」
「は、はい……」
なんとしてでも女子生徒の実績を作りたいのだろう。校長の熱い説得に、両親も不安ながら頷いた。私としては、勉学第一の学生生活は二の次だったので、校長の話はありがたかった。
これで友達もたくさんできそうだ。それに男装なんてスパイみたいで面白そうじゃ

ないか！　十五歳の私は、あまりにも楽観的だった。
「ぜひ、よろしくお願いします」
私は頷き、校長と握手した。
それが地獄の始まりとは思いもしない、爽やかな笑顔で。

◇　◇　◇

男子生徒として入学して、はや1ヶ月が経とうとしていた。
最初は慣れなかった男子のブレザー制服も、今は体に馴染んできた気がする。身長は女子としては高めの一六〇センチなので、小柄な男子と一緒にいれば目立たない。胸は小ぶりのBカップ（発展途上だと思いたい）だ。今の時期はカーディガンを羽織れば、ブラジャーを身につけなくても胸の膨らみは気にならない。夏はさらしでも巻けば大丈夫だろう。髪は入学前にショートカットにした。見た目は、線の細いひ弱な男子そのものだ。
最初こそ周りの視線が気になったが、まさか男装の女子がいるなんて誰も思わないだろうと考え、堂々と過ごす事にした。今ではクラスにも馴染め友人もできたので、学

生生活は順風満帆だ。

「ゆう、今日放課後ひま？」

昼食時、向かいに座るタケとミヤが話し出した。彼らは同じクラスの友人だ。入学式で親しく話しかけてくれて、それ以来毎日一緒に行動している。タケとミヤは同い年なのに、中学時代バスケ部だったらしく筋骨隆々で身長も一八〇センチ以上ある。一緒に並ぶと私の小ささが目立つが、二人は私の見た目を揶揄ったり、嘲笑ったりしないので居心地がいい。

「暇だけど……なに？」

「じゃあさ、ミヤんちで数学教えてくんね？　俺ら明日の小テスト自信なくてさ」

「ゆう、お願い！」

二人は両手を合わせて頭を下げた。二人にはいつも仲良くしてもらっているし、断る理由もない。快く頷けば、彼らは「楽しみにしてるぜ！」と笑っていた。

放課後三人でミヤの家に向かう約束をして、私たちは食堂を後にした。女子であることを隠すのは少し罪悪感があるが、入学して初めての友人との約束は、私の心を浮かれさせた。

◇　◇　◇

ミヤの家は学校から徒歩十五分ほどで、三人で話しながら歩けばあっという間だった。両親が仕事で不在とのことで、二階のミヤの自室に直行した。

「うわ、めっちゃ綺麗じゃん。意外〜」

タケは笑いながら、ベッドにその巨体を沈ませた。

「おい、勝手に寝るなよ！　ゆうも適当にくつろいでくれ。僕、飲み物取ってくる」

「あ、ありがとう」

ミヤが部屋から出ると、タケはニヤニヤしながら部屋を物色し始めた。

「おい、タケ。人の部屋なんだからあんまり荒らさないほうが……」

「ゆうは本当真面目だよなぁ。……こいつはどこに隠してんのかな〜。ベッドの下じゃねえなぁ」

「ちょ、何探してんだよ。やめなよ」

「お！　あったあった！」

私の制止も無視して、タケは目当てのものを本棚から見つけたらしい。彼が意気揚

々と見せてきた『それ』に、私は思わず目をそらしてしまう。
「んだよ〜、ゆうだって読んでるだろ？」
タケはニヤニヤしながら、M字開脚しておまんこを見せびらかす女の子が表紙の漫画を私の目の前に持ってきた。そう、いわゆるエッチな漫画だった。もちろんそんなもの読んだことないし、見たこともない。中学生の時は、クラスで少し大人っぽい女の子たちが、先輩とエッチしたとか誰々とキスしたとか、そんな話を聞いたことがあるが、私には縁のない大人の世界の話だと思ってたのだ。
「よ、読むわけないだろ！　元あったとこに戻せよ！」
恥ずかしくて声が大きくなる。目を逸らす私に、タケは珍妙な生き物を見るような目で見てきた。
「お前まじか？　嘘だよな？　……ほら、見ろよ！　おっぱいとおまんこだぞ？」
タケは漫画を開くと、私に押し付けてきた。
「〜〜〜っ！　や、やめろっ！」
裸の絵が飛び込んできて、目がチカチカする。互いに漫画を押し付けあっていると、ジュースをお盆にのせたミヤが戻ってきた。
「……お前ら何してんの？」

「おー、ミヤ！　こいつヤバイぜ！　エロ本読んだことないとか言うんだ」
「〜〜〜っタケ！　うるさいっ！」
「え、ゆうこういうの読んだことないの？　嘘でしょ？」
ミヤはお盆をテーブルに置くと、タケと一緒にベッドに座った。「ほら、お前も座れよ」と、腕を引っ張られ無理やり二人の間に座らされる。ガタイの良い二人に挟まれてしまえば、身動きも取れない。彼らは私の膝の上にエッチな本を開いた。女の子がおっぱいを揉まれながら、おまんこにぎちぎちにおちんちんを挿入されている。あまりの卑猥さに目を逸らすと、ミヤが私の肩を抱きそれを阻止した。タケは私の顔を覗き込み、「おいおい、まじで読んだことねえの？」と驚いている。
「よ、読まないよ！　読むわけないじゃん」
「お前まじで言ってんの？　じゃあいつも何で抜いてんの？」
「……抜く？　何を？」
私が聞き返すと、二人は目を丸くして驚いた。
「……お前ちんこしこったことねえのか？」
「女っぽいなぁとは思ってたけど、ゆうって本当に男？」
タケとミヤは、私を怪しむ様に肩や腹をペタペタ触ってきた。こんなところで性別

がバレる訳にはいかない。焦った私は、身体をよじって抵抗し、エッチな本に手を伸ばした。
「お、男だよ！　失礼だな！　……ぉ……お、オナニーはしたことないけど、……男だから、こういうのは興味あるし！　親にバレたくないから、本とか持ってないだけだよ」
内心冷や汗をかきながら、とりあえず漫画を読むフリをしていると、二人はニヤニヤしながら私の肩を抱いた。
「んだよ〜、そうならちゃんと言ってくれよな。じゃあさ、ミヤ、……教えてやろうぜ？」
「……そうだね。友人としてここはしっかり教えてあげないと」
「え？　な、なにを？」
二人の纏う雰囲気が急に変わった気がして恐る恐る聞けば、ミヤは私の耳に吹き込むように「オナニーの仕方だよ」と囁いた。背中から何かがぞわぞわっと這い上がってくる感覚に、言葉が詰まる。
「〜〜っ！？　な、何言って――」
「ほーら、ゆうは何も知らないんだから、僕とタケで一から全部教えてあげるよ」

「だなっ！　オナニーもまだって事は、精通もだろ？　今日がゆうの精通記念日だな。はいはい、おめでとー」
　タケは私のズボンのベルトをいとも簡単に取り払うと、チャックを下ろした。男物の下着を履いているとはいえ、下着をおろされてしまえば女だとバレてしまう。私は必死にパンツを掴んで抵抗した。
「や、やだっ！　だ、大丈夫、いいからっ！」
「大丈夫だって。俺ら友達だろ？　まかせろって」
「〜〜〜っ！？」
　タケは、私の肩にまわしている腕をそのまま伸ばして、胸を覆うように触れてきた。驚いて彼を見ると、タケは「どうした？」と首を傾げるだけだった。胸の膨らみでバレたかと思ったが、どうやらBカップではバレないらしい。固まっている私に、ミヤが優しく声をかけた。
「ゆうごめんな？　タケのやつ、たまにスキンシップ激しいからびっくりするよな」
「あ、う、うん……えと、」
「まぁでも、この歳で精通してないとちょっと心配だし。抜き方は知っといたほうがいいと思うよ。僕たち友達として、ゆうのこと心配してるんだ」

「で、でも……」
パンツを掴む私の手の上に、ミヤがそっと手を重ねた。そのまま中指でスリスリと手の甲を撫でられ、体がびくりと震えてしまった。タケは「な？　安心して俺らにゆだねろよ」と耳元で吐息のように囁き、胸を覆いながら円を描くように撫でた。二人のいけない雰囲気に挟まれ、身体の力が抜けてしまう。
ミヤはその一瞬の隙を見逃さず、するりとパンツを脱がした。毛もほとんど生えていないおまんこが曝け出される――
（やばい！　バレた！）
瞬時に両手で隠そうとすると、両側から腕を取られ阻止された。
「やだっ！　ミヤ！　タケ！　やめて……っ！」
「大丈夫大丈夫。ゆう、最初は勃起してないから小さくて当然だよ」
「そうそう。触ったり興奮したりしねえと、ちんぽはおっきくなんねえんだから」
「え……？」
嘘でしょ、バレてない？　驚きで二人を見上げるも、彼らは至って真面目な顔で、私を安心させようと頭を撫でたり、肩を撫でたりしてくれている。ラッキーなことに二人は私のクリトリスをおちんちんと勘違いして、男子と信じているようだ。私は、

性別がバレていないことに安堵し、ひとまずこの空気に乗っかってさっさと終わらせてもらうことにした。身体の力を抜き「早く終わらせて、数学の勉強しよう」と呟くと、二人は「まかせろ」と満面の笑みで答えた。
「じゃあゆう脚広げて、膝立ててみて」
「あ、でも……」
「男同士そんな恥ずかしがることねえって。ちんこの見せ合いなんて普通だぜ」
下半身は白靴下しか身につけていない状態なので、恥ずかしくて戸惑ってしまう。しかし、男同士なら普通と言われてしまえば、そんなものかと納得するしかない。震えながら、ゆっくりと膝を立てて足を開く。左右からタケとミヤが股間を覗き込んできた。二人ともおまんこを凝視するので、恥ずかしくて足を閉じようとすると、無言でミヤに阻止された。
「……うん、ゆうのちっちゃくて可愛いちんちん見えた。閉じちゃダメだよ」
「ぴこって顔覗かせてんの可愛いな。これから俺たちでしっかり勃起させてやるからな」
「う、うん……んっ！」
早速タケが、クリトリスを人差し指で弾いた。他人に触れられたことがないので、

甘い声が出てしまったことに自分で驚く。男らしくしなきゃと口を塞いで堪えようとすると、ミヤが私の腕を掴んだ。
「ゆう、声我慢しなくていいよ。僕も自分で触る時、気持ち良くてたまに声でちゃうし」
「そうそう、俺も俺も。……ほら、ゆう見てみ。ちょっと触ったらエロい汁出てきた」
「えっ、んぅ……！　やぁっ」
「これを、ちんぽに塗り込みながら触ったら気持ちいいんだぜ」
「んぁっ！？　えっ、あっ！　ま、まって……っ！」
タケはおまんこから出てきたネバネバの液体を人差し指ですくうと、円を描くようにクリトリスに塗り込んでいく。
「おぅっ！　ま、って！　ひぅっ、んゃあっ！」
「ふふふ、ゆうすっごい身体ビクビクしてるね」
「な？　気持ちいいだろ？　俺もシコる時ガマン汁でぐちゅぐちゅこすんの好き」
「やぁあっ！　んぁっ、ひゃあ、ま、まってぇ……やぁっ」
タケがクリトリスを擦るたびに、下半身がムズムズしてお腹の奥がきゅうっと疼く。

今まで感じたことのない変な感覚に身体を震わせて耐えていると、ミヤが心配そうに顔を覗き込んでくる。
「ん？　ゆう怖い？　ちんちんしこしこするの初めてだもんね？　大丈夫だよ」
そして、私の胸を服の上から覆うように触れ、そのまま人差し指で乳首をほじくるように刺激しだした。
「んやぁっ！？　ミヤ、やぇてっ！　んぅ……っ」
「乳首も刺激したほうが気持ちよくなりやすいと思うから、ね？……あれ？　ゆう、乳首おっきいね？　ほじほじしても、おっきいから全然指が埋まらないや」
「んぅっ！　っは、ぅぉ！……ッ！……ひぅ」
「え、俺も俺も！　ゆうのでか乳首触りたい！」
タケがクリトリスを刺激しながら、もう片方の乳首を服の上から引っ張った。
「ひゃぁあっ、ぁぅっ！　ま、まって、つよい、っから……んぅ」
「うっわ、ほんとでけえ。女みてーじゃん」
「…っがう！　ちがうっからぉっ……あ、あ、あ、」
「タケ、からかうのはやめろ。ゆうだって好きでこんなおっきい乳首勃起させてるわけじゃないんだ」

「〜〜〜〜っ！　も、やぁっ……ひゃあぅ」
「ふふふ、気持ちよさそうだね。タケは乳首弄りながらオナるの？」
「俺はちんぽだけ。あ、ゆうちんぽちょっと勃起してきたぞ。ほら、真っ赤っかでさっきより大きくなってるだろ？」
タケの指摘通り、クリトリスは先ほどよりひと回り大きくなっていた。赤く腫れ、えっちな汁を纏ってすごくいやらしい光景だった。クリトリスをくりゅくりゅと刺激されながら、乳首をほじくられると、下半身に気持ちいいのがどんどん集まってきて、自然と足に力が入ってしまう。
「ぞぉッ！　も、もぉいいっ！……なんか……っ、だっめぇ……！」
「ははっ、ちんちんおっきくしといて何がダメなの？　ゆう、こういう時は気持ちいいっていうんだよ？」
「んぅぁお！！　あ、あ、あ、あ、……と、とめ、てぇ！　だ、だめ、だぇなのぉっ」
「うーわ、ちんぽガッチガチに硬い。ほら、これでシコシコできっからな？」
「んゃあっ！？♡」
タケは、人差し指と親指でクリトリスを挟むと、上下にしこしこと扱きだした。先

程のゆっくりとした刺激と違って、強制的に射精させるための刺激だった。両足に力が入って、靴下の中で足の指がパッと開く。くちゅくちゅくちゅとえっちな水音が聞こえてきて、耳までおかしくなりそうだった。
「んぅぁお！　あ、あ、あ、あ、あ、と、とめ、てぇ……っ！」
「ほら、ゆうのちんぽ勃起して立派なちんぽになったぞ！　よかったな！」
「ふふふ、ほんとだ。ちんちんおっきくしてもらってよかったね。乳首も直接しこしこしてあげるから、ほら気持ちいいって言いなよ」
ミヤがシャツの中に手を入れて、乳首をぎゅうっと摘んで捻り上げるように強く引っ張った。クリトリスの刺激と乳首の刺激で、快感がどんどん這い上がってくる感覚に、怖くて視界が滲む。
「ぞっ！　いぞぁあっ！　らぇなのっ、らぇぞっ、らぇぞっ！」
「ちんちんも乳首もしてもらって、泣くくらい気持ちいいね？　ね？」
「ほーら、ちんちんシコシコくちゅくちゅ気持ちいいな？」
両隣から、耳にキスされながら優しく囁かれる。もう頭が回らない。ぜんぶ、全部気持ちいい。
「……いぃっ、きもちぃっ！　きもちぃっ！♡」

「ふふっ、素直に言えて偉いね。ちんちんも顔も真っ赤っかだ。このままイっちゃうかな？」
「ゆうイきそう？　ほら、男ならイく時はちゃんとイくって言うんだぞ」
「ぉっ！！　ぎもぢっ、ぉっ！　ひゃぁっ！　あっ！　あぇ！」
タケのクリトリスを扱くスピードが速くなる。この快感が駆け上がっていくような感覚がイくということなのだろうか。私は無我夢中で刺激を受け止めた。
「ぉっ！　き、きもぢぃぃっ！♡い、いっ♡いくっ、いくっ、いくっ、」
「うーわ、イく直前のガチガチちんぽえっろいなぁ……ほら、このまま精通しちまえ」
「乳首もちんちんシコシコも気持ちいいね。ふふふ、精通頑張れ頑張れ」
「ぉっ！♡きちゃ、ぅ……すごいのっ、ぉ、アッ！！　いぐいぐっ♡いぐっ♡いぐっ♡」

——くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅちゅちゅ

「おっ～～～～～～～～！！♡♡♡……んぉ……っ♡……、……♡♡♡」

M字開脚のまま腰を突き出すように絶頂した。絶頂の余韻を逃すために、カクカクと腰を振る。これでやっとテスト勉強をして帰れると心の中でほっとした。
「はぁ、はぁ……も、イったから……勉強しようよ……」
「え？　いや……ゆう、お前イってねえじゃん」
タケがニヤニヤしながら、「なぁ？」とミヤに声をかける。ミヤも頷いて、再度私の足を開かせた。
「え？　な、なに……？」
「何ってお前出してねえじゃん。射精してねえからイってねえじゃん」
「ゆう僕たちに嘘ついたの？　僕ら、ゆうのために頑張ってるのに」
「ち、ちがっ、違うよ！　ほんとにイったから！」
「だから射精してねえって言ってるじゃん。ほら、俺らも頑張るからちゃんと精通しようぜ？」
「や、やめ……や、やだっ！　やだぁっ！」
「やだやだしてもダーメ。怖いの？　僕らがいるから大丈夫。ちんちんしこしこされて頑張って射精しようね？」
「や、やぇっ……おっ！？♡」

イったばかりの敏感なクリトリスを摘まれ、大きな声が出てしまう。そんな私をよそに、ミヤが首を傾げた。
「うーん……。タケ、ゆうのちんちん皮被ってるからさ、剥いてあげる？」
「あ、そっか。剥いたほうがイきやすいんかな。オッケー」
「……っ？……なに、なにするの……？」
「ゆう怖がらなくていいよ。包茎ちんちんを立派な皮むきちんちんにするだけだからね？　ほら、僕と手繋いどこう」
ミヤが微笑みながら左手で私の両手首をまとめた。優しい笑顔と口調なのに、絶対抵抗できない力だった。そして、右手を背中から回して再び乳首を愛撫しだす。
タケは私の前に回り、おまんこの前に跪いた。それから左手でおまんこをしっかり広げ、右手の中指と人差し指をクリトリスの両側に置き、ググッと左右に広げた。そして、そのままゆっくりとお腹側に指をスライドさせた。むりゅ……むりゅ……と、クリトリスの皮がめくれ始める。
「んゃあぁおっ！！？？　まっ、おっ、……いやあぉっ！！」
「ほーら、ちょっとずつちんちん剥けてきたぜ」
「ふふふ、ゆうの可愛いちんちんがカッコよくなるね。頑張れ頑張れ」

「ぎっぢ！　ぎっぢ！　きづいっ！　ぎづいっ！！♡」
あまりにもきつい刺激に頭を振り乱し、体をよじる。
「あー、ミヤちゃんと押さえて」
「わかってる。……ほら、ゆう。怖くないよ？　乳首くりくりしててあげるからこっちに集中しよっか？　皮むきしてかっこいいちんちんでイこうね？」
「やぁだぁぁぁっ！！　あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡」
ミヤが乳首を指で素早く弾くので、気持ちよくて身体の力が抜けてしまう。タケは大人しくなった私の足に、音を立ててキスをすると、そのままクリトリスの皮を剥き切った。
ぷりゅんとクリトリスが顔を出した。皮の被っていないクリトリスは、空気に触れるだけで腰が震えるほど非常に敏感だった。
「ぉ……♡あっ……♡」
「よーし、かっこいい剥きちんぽになったぞ。ほら見てみろよ、ゆう」
「やったね、ゆう。かっこいいちんちんだ。これでいっぱいシコシコしてもらおうね」
「ぞっ……ぞっ…ゃらっ、もぉやら……っ」

こんな敏感な器官をまたしこしこ擦られたら死んでしまう。これから起こることが怖くて、涙をためて頭を必死に振る。するとミヤもタケもニコニコと微笑み、ミヤは乳首を、タケはクリトリスを、きゅむっと摘んでしこしこと扱き出した。

「ぁっ〜〜〜〜〜〜!、?♡♡」

あまりの刺激に、いきなり絶頂してしまう。ぴんと腰を突き出すが、二人は素知らぬ顔だ。

「ん？　ゆう腰カクカクしてどした？」

「おっきいお目目開いて、こぼれちゃいそう。かーわい」

「いっ……♡いっ……♡いっだ！♡いっだ！♡」

「だーかーら、射精してねえだろ？　おら、もっとシコってやるからちゃんと射精しろよ？」

「ぼっ！？♡い、いっだの！♡いっだの！♡いっだのぉお！♡」

「ゆう、僕たち真面目にやってるんだから嘘つかないで。ほら、頑張れ頑張れ」

二人は刺激をやめてくれないので、絶頂の余韻を逃すこともできず、そのまま刺激を受け止め続けた。絶頂した体には、拷問のような刺激だった。クリトリスがパンパンに腫れて、扱くタケの指がびちょびちょに濡れて光っている。

「ぞああぁ〜っ！！♡むぢっ！　むぢっむぢぃぃっ！！♡♡」
「んー、今にも射精しそうなくらい勃起してんのになー」
「タケもう少し早く扱きなよ。……ほら、ゆうのちんちん頑張れ頑張れ」
「あ、あ、あ、あ、……んぉっ！？♡♡いく！またいぐ！♡いぐからっ！♡」
——くちょくちょくちょくちょくちょくちょくちょ……
クリトリスを扱く指が、荒々しく素早い動きになった。射精を強制的に促すような手つきだった。射精する器官ではないのに、なぜか出そうな感覚が下半身に集まってくる。
「おっ！♡ぎっ！♡まっで……っ！　はや、ぃっ…！　と、とぇて、とぇて♡んぢっ♡あ、あ、あ、あ、あ、」
「ほら、ちんぽパンパンだぞ。早く出せって」
「ひぃッ！？　んぢぁああぁっ♡♡まっれ！♡まっれ！♡……ッ！？……だぇっ、くるっ！　こぁいのくるっ！！　きっ、きぢゃぢっきぢゃぢっ♡♡」
「ふふふ、怖くないよ〜。ほら、射精頑張ろうね。いっぱい出しちゃえ、ほら、ほら、」
「おっ！♡おっ！♡おっ！♡いくっいくいくいくっ！！……いっぐ！！♡……んぉっ

〜〜〜〜〜〜〜〜！！！♡♡……っ……っ！！」

——ブシュッ！！　びゅっ！　びゅっ！……ちょろっ……

絶頂と同時におまんこから透明な液体が勢いよく吹き出した。そのまま何回かに分けてて出ると、最後に勢いをなくしたものがちょろちょろと溢れた。

「ゆうすごいすごい！　いっぱい出せたね！　精通おめでとう」

ミヤは嬉しそうな声をあげて、拍手した。

「すっげぇ……こいつまじで出した……」

タケは驚愕の声をあげていた。

絶頂の余韻で体を痙攣させる私には、タケの言葉の意図を汲み取ることができなかった。そのまま視界がどんどん狭くなっていって、私は気を失った。

◇　◇　◇

——パシャッ……パシャッ……

タケは気を失った女の痴態を写真に収めていた。ミヤはそれを眺めながらポツンと

呟いた。
「んーまさか潮吹きするとは思わなかったな」
「いやほんとそれ。まじでこいつ敏感すぎるだろ」
「可愛いなって思ってたけど、今日ので本当にすっごく可愛いことがわかった。早く僕のにしたいな」
「はぁ？　二人で共有するって約束だろ！」
「あーはいはい」
ミヤは軽くタケをあしらうと、「あ！」と思いついたかのような声をあげた。
「三人で記念撮影しようよ。友達の初射精記念日」
「はっ……お前本当最低だな」
タケは呆れたように笑うと、スマホのカメラモードを内カメにした。下半身は靴下だけでおまんこをさらけ出して気を失う女を間に挟み、男たちは笑顔でピースした。
「「ゆう！これから高校生活楽しみだな！……ハイチーズ！」」